

「ドイツ学生派遣プログラム 参加報告書」

京都大学経済学部 4年
水野祐地

- ① 今回のプログラムにおいて自分にとって最も有意義であったことは、ドイツ最大の鉄鋼業系労働組合であるIGメタル社がボランティア活動として行っている”Der Laden”と呼ばれる難民受け入れセンターを訪問できたことである。この受入センターは、ドイツ中央政府や州政府には対応がままならないが、難民のドイツ社会への統合にとって不可欠なプロセスを担う役割を果たしている。例えば、難民の職業や能力別フィルタリングを行い難民のドイツ経済への統合や適応を後押ししており、他には難民へのドイツ社会における規範や文化教育を行い社会的・文化的統合に必要な能力を付与している。これらの作業は、一人当たりに対し多大な時間を要するが、フランクフルトの移民受入センターでは人員不足で対応できていない。このボランティア機関を、IGメタルのような労働組合が人道的観点から設立することで、フランクフルトの難民受入に重要な貢献を担っているという点は興味深い。これは、ドイツ社会において、政府だけでなく経済界などがダイナミックに難民受入について積極的な活動を行っている一つの事例と言えるだろう。もし日本やその他の国が、将来において難民あるいは移民受入へと舵取りする必要に迫られた場合、このような社会全体やビジネス・経済界を巻き込んだ積極的な受入システムの構築への意識という点について考える必要があるだろう。このような社会の構成員にまで浸透している人道的意識は、例えば反原発団体や再生可能エネルギーへの転換を推し進めている州政府との対話の中でも意識させられた。「なぜドイツは隣国のフランスとは違い原発からの撤退が進んでいるのか」という問いに対し、彼らはドイツ社会の間でリベラリズム的観点がより普及していることについて示唆していた。これは、ナチスドイツ政権下でのドイツ社会の行ったことへの贖罪という歴史的な意味があるのではないかという。このような点への考察は、自分の研究テーマについて考えるための非常に重要な材料を提供してくれたと考えている。
- ② ドイツでは経済・政府・市民活動など社会の様々なセクターで活動する企業や機関、団体を訪問し、彼らとの対話を通してこれらの組織がどのような意識を持ち、どのような考え方の元に活動しているのか学ぶことができた。自分にとっては、例えば反原発の問題などに関して、ドイツでは当たり前だけでも日本ではそうでない、といった事例がある点を追及し、根底にある意識の違いがどのようなものなのか、という対話を通さねば見えてこないことについて学べる良い機会となった。
- ③ 様々な異なる組織を訪問した。フランクフルトにて訪問・対話を行った組織は、ボンにある国連事務所、公正取引委員会にあたる組織、企業誘致を行うPR事務所、反原発団体、職場における男女平等を促進する組織、州政府のエネルギー部門、空港の管理局、労働組合とその元の難民受入センター、大学での講義、横浜市の姉妹都市事務所、そしてハイデルベルクではハイデルベルク大学との共同発表会を行った。
- ④ 最も大きな影響を与えたことは、難民受入センターでの事務員との対話の中で見えた難民と社会との接触から生まれるある現象の発見にある。これは、様々な異なる社会的、民族的、宗教的背景からドイツにやって来る難民が、ドイツ社会において共存を迫られ、またドイツでのリベラル教育を経ることにより、翻って元々対立していた社会集団間が難民となって亡命した先にて関係を改善できるのではないか、ということである。これは、事務員との対話の中で、受入センターが最も腐心していることの一つとして対立する社会集団間の不信感をどのように和らげるかにあると触れられていたことから見えてきたことである。これはまだ一つの仮説にすぎないが、今後難民受入が進展する中で結論が見えてくることだろう。このことの発見は、イスラーム社会におけることなる宗派や宗教集団の間での対立についてどのような構図があるのか分析する上で重要な観点を提供してくれると期待している。